

平成 11 年版 新国民生活指標 (PLI)

1 「新国民生活指標」(PLI)作成の趣旨

- (1) 「新国民生活指標」(PLI:People's Life Indicators)は、国民の生活実態を多面的にとらえるための生活統計体系である。
- (2) 従来、生活の豊かさは、GDPや所得などの貨幣的な指標でとらえられがちであったのに対し、本指標は、豊かさを非貨幣的な指標を中心に、多面的にとらえるものである。

2 平成 11 年版 PLI (平成 9 年値 PLI) の特徴

- (1) 平成 9 年 (97 年) PLI の推計結果 (8 つの生活活動領域からみた特徴)
 - 平成 9 年 (1997 年) PLI について、8 つの生活活動領域ごとに、96 年と比較してみると、「住む」「癒す」「遊ぶ」「学ぶ」「交わる」の 5 領域で上昇した (96 年も 5 領域で上昇)
 - 特に、「癒す」(高齢者福祉等)、「学ぶ」(高等教育、社会教育等)の上昇幅が大きい。
 - 一方、「費やす」「育てる」は低下し、「働く」も伸び悩んだ。(「費やす」の低下は、PLIを算出している 80 年以降で初めて。「育てる」は 96 年に初めて低下し、97 年は 2 年連続の低下。)
 - 「費やす」「働く」の動きは経済の低迷をも反映したものとみられ、また、「育てる」(子供・初中等教育関連)の低下は少年犯罪・非行、校内暴力、不登校の増加等による。
 - 以上のように上昇する領域と低下する領域に両極化する動きがみられた。

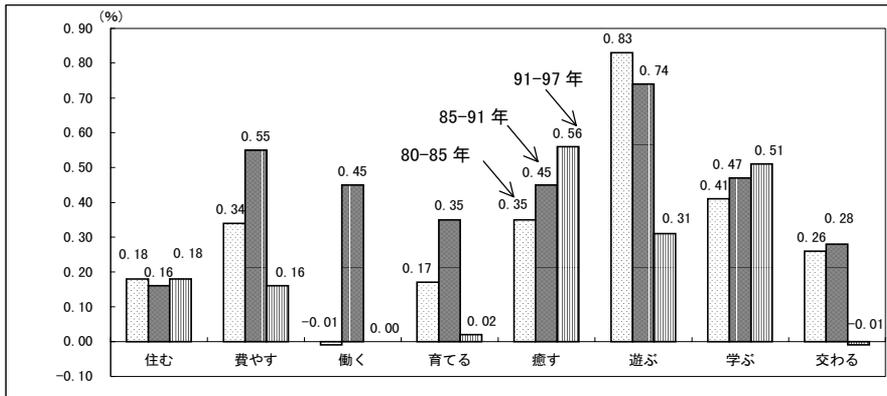
- (4 つの生活評価軸からみた特徴)
 - 4 つの生活評価軸別にとると、「公正」「自由」「快適」の 3 つの評価軸で上昇した (96 年も同じ)。特に「公正」(福祉等の社会のやさしさや格差の少なさ)の上昇幅が大きい。
 - 一方、「安全・安心」は低下した (6 年連続)。これは犯罪・非行関係、交通事故、個人破産等の悪化による。
- (2) PLI の長期的動向 (8 つの生活活動領域からみた特徴)
 - PLI の 1980 年以降の長期的動向について、8 つの生活活動領域別にとると、すべての領域で 1980 年よりも 97 年の方が水準が向上している。
 - 90 年代に入ってから動きを 80 年代後半の「バブル期」と比較してみると、8 つの生活活動領域のうち、「癒す」「遊ぶ」「住む」の 3 つは伸びを高めている (ただし、後 2 者はわずかな高まり)。
 - 一方、経済の低迷も反映して「働く」「費やす」「遊ぶ」の伸びは低くなっており、また「育てる」「交わる」もこのところ低迷するなど、5 つの領域で伸びが低下している。
- (4 つの生活評価軸からみた特徴)
 - 4 つの生活評価軸でみると、「公正」「自由」「快適」の 3 つは、80 年よりも水準が向上している。特に 91 年以降は「公正」が高い伸びとなっている。これは高齢者福祉関係指標の高い伸びやバブル崩壊後の土地資産格差の縮小などによる。
 - 一方で、「安全・安心」は 80 年よりも水準が低下しており、近年も雇用関係、交通事故、犯罪・非行関係の指標等の悪化により低下傾向にある。

過去 3 年間の PLI の伸び

(ポイント)

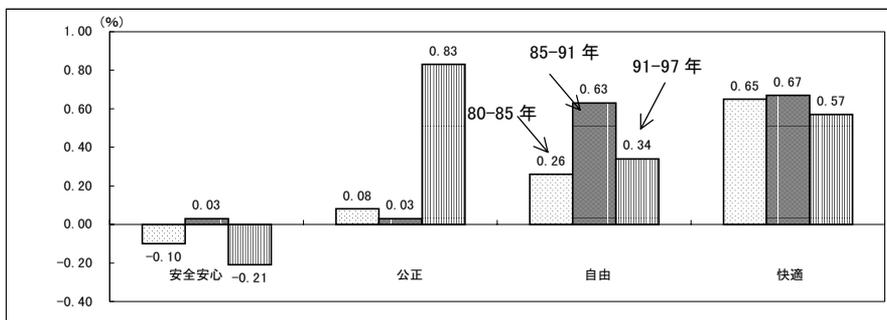
	生活活動領域別								生活評価軸別			
	住む	費やす	働く	育てる	癒す	遊ぶ	学ぶ	交わる	安全安心	公正	自由	快適
平成 7 年 (1995)	0.25	0.05	0.05	0.05	0.33	0.16	0.47	0.00	-0.17	0.50	0.14	0.64
平成 8 年 (1996)	0.12	0.44	-0.13	-0.24	1.05	0.13	0.58	-0.04	-0.30	0.94	0.34	0.63
平成 9 年 (1997)	0.04	-0.06	0.01	-0.44	0.53	0.24	0.49	0.32	-0.26	1.01	0.07	0.40

生活活動領域別時系列 3 期間比較—90 年代には、「遊ぶ」から「癒す」へ改善の主役が交代



(備考) 各生活活動領域の 1980 年-85 年、85 年-91 年、91 年-97 年の各期間の年平均の伸び率である。

生活評価軸別時系列 3 期間比較—バブル期に低く、90 年代に高い「公正」の伸び



(備考) 各生活評価軸の 1980 年-85 年、85 年-91 年、91 年-97 年の年平均伸び率である。

資料：経済企画庁国民生活局